Streptococcus suis による細菌性髄膜炎および菌血症の一例

◎高野 咲来[1)]、鷲尾 洋平[1)]、杉本 諒司[1)]、青木 美澪[1)]、篠山 明宏[1)]、井上 淳[1)]、遠藤 康実[1)]
日本医科大学付属病院 臨床検査部[1)]

背景：*Streptococcus suis* は健康な豚やイノシシの鼻腔や咽頭に常在している。豚肉を扱う職業との関連性が高く、ヒトに感染すると主に髄膜炎といった人畜共通感染症の原因となる。症例：47 歳、男性、調理師。既往歴：なし。
202X 年 10 月 1 日、勤務先にて豚肉を扱った手で眼を掻いてしまい腫れた。その夜から腰痛が出現、翌日には体動困難により救急要請し、搬送先にて腰椎関節ブロックを施行したが症状の改善はなかった。10 月 4 日に他院を受診、軽度意識障害と診察中に全身痙攣を認め、当院救命救急科へ緊急入院となった。来院時所見：意識状態 E2V2M5、血圧 162/88mmHg、脈拍 144 /分、体温 38.7℃、項部硬直あり、血液学的検査で白血球数 16,800/μL(好中球 93.6%)、PCT 22.50mg/dl。頭部 MRI 検査の FLAIR 画像で脳表に高信号を認め、髄液検査で、有核細胞数 6,143/μL(多核球 98.4%）、蛋白 684mg/dl、糖 10mg/dl 未満(血糖 257mg/dl)と細菌性髄膜炎が疑われ、髄液および血液培養が実施された。細菌学的検査：動脈血液培養は 2 セット中 1 セットの好気・嫌気ボトルが 6 時間で陽転化した。両検体のグラム染色ではグラム陽性レンサ球菌が観察された。35℃・ 14 時間好気培養したヒツジ血液寒天培地上で腸球菌様の α 溶血コロニーを形成したことから本菌を疑い、質量分析で *S. suis* と同定された。抗菌薬は MEPM と VCM から ABPC への de-escalation が行われ、第 5 病日には意識レベルが改善し、第 37 病日に退院した。16S rRNA 遺伝子解析では血液由来・髄液由来株ともに *S. suis* ATCC43765 株と 99.93%の相同性を認め、血清型２型と判明し、生化学的性状からも *S. suis* と同定された。考察：*S. suis* による細菌性髄膜炎の発生頻度は稀であるが、本例ではその診断に髄液グラム染色と職業歴が有用であった。また、*S. suis* 感染症は創傷感染が多く報告されているが、本例に受傷歴はなく、侵入門戸は目であることが示唆された。髄液グラム染色検査における職業歴確認の重要性について考えさせられる症例を経験したので報告した。

謝辞：遺伝子解析および莢膜血清型の同定を実施していただきました、国立感染症研究所 池辺 忠義先生、常 彬先生に深謝申し上げます。

03-3822-2131